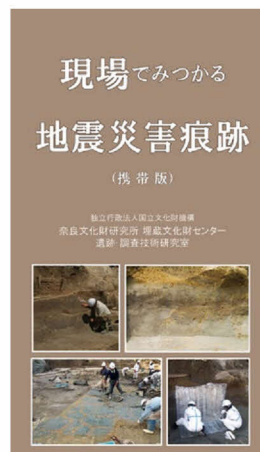


「現場でみつける地震災害痕跡」の紹介

死傷者 6 千人を超えた阪神・淡路大震災から今年で 23 年が経ち、この間に液状化が発生しやすくなる等、被災規模が大きくなる震度 5 弱以上は 109 件発生しました（気象庁 HP「日本付近で発生した主な被害地震（2018.9.7 現在）」にもとづく）。この発生件数は、私たちの暮らしがいつ地震災害によって一変するか分からないことを示しています。

奈良文化財研究所では、2014 年から国立文化財機構が推進する「文化財防災ネットワーク推進事業」、さらに地震・火山噴火予知研究協議会に「考古資料および文献史料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」事業を通して参画し、防災・減災への取り組みをおこなっています。この取り組みは、主に発掘調査にともなって発見される様々な災害の痕跡情報を集成し、そこから全国の災害履歴のデータベースを作成し、様々な防災、減災研究の基盤を整備することを目的としています。発掘調査では、災害痕跡調査が主目的になることはありませんが、近年、その情報の重要性が認識されるようになり、多くの現場から災害痕跡の認定や調査、記録方法についての質問が届くようになりました。

そこで今回、まずは調査現場で発見される地震の災害痕跡について、1) よくみられる堆積構造の名称や形状パターンと基本的な発生メカニズムについての説明や、2) 調査現場で地震の痕跡として判定する際の確認すべき項目や記録方法、3) 地震痕跡と誤認しやすい事例や調査担当者の目からみた地震痕跡のイメージについての聞き取りを野帳



リーフレット表紙

サイズに簡潔にまとめた、携帯版「現場でみつける地震災害痕跡」をとりまとめました。埋蔵文化財調査の新しい切り口として、また未来の私たちの生活のためにも、現場でご活用願えたらと考えています。

(埋蔵文化財センター
村田 泰輔)